

【尾道企業家列伝 ～尾道ゆかりの先人企業家たち】

中世の時代から商港都としての歴史を刻む尾道は、古くから商人が活躍してきた町であり、とりわけ江戸時代後半から近代にかけては、豪商と呼ばれる大商人も多く登場しました。そうした商業盛んな商人の町としての風土は、また一方で、尾道から大きく世に羽ばたく企業家（会社の経営者）を多く輩出しています。

大なる志を立てて尾道から旅立ち、商都大阪で勤勉・誠意・努力奮闘によって大実業家へ雄飛し、その莫大な富を、故郷尾道では上水道敷設という一大公共事業で還元した山口玄洞（旧尾道出身。尾道市名誉市民）…

玄洞同様、若くして大阪へ出て丁稚奉公に励み、独立起業後は水道送水管の製造に独力で挑戦し、研究努力の末に国産化に成功、後に農業・工作機械で有名な「クボタ」創業者となる久保田権四郎（因島出身。尾道市名誉市民）…

明治の時代、蚊取り線香の原料となる除虫菊栽培の普及に努めて全国を駆け回り、向島でも種苗を無料で配り、島内での栽培と普及を啓発、その功績を称える頌徳碑を千光寺公園に遺す、金鳥でお馴染みの大日本除虫菊株式会社創業者の上山英一郎…

尾道に生まれ、各地を点々と流れた末に、“造船の島”となりつつあった因島に落ち着き、造船の下請業から旅館業、現在のホテル・ナティーク城山の前身となる城山倶楽部の経営を手掛けるなど、当地方における女性経営者の先駆けとなった男装の女傑・麻生イト…

小さな鉄工所で人一倍汗を流し、当時は目新しい酸素溶接という新技術を習得せんと大阪へ出、へこたれない不屈の精神と並々ならぬ努力でこれを習得、工場創業後も熱心に研究を続け、新製法を発明して2つの特許、3つの実用新案を獲得した耕三寺耕三（後に瀬戸田に耕三寺を開いた。尾道市名誉市民）…

教師から一転して久保田権四郎の下で働き、権四郎同様の研究熱心さでメキメキと頭角を現し、見込まれて久保田鉄工所（現クボタ）3代目社長に就任、クボタ中興の祖と仰がれると共に、大阪商工会議所会頭として地域経済にもその手腕を発揮した小田原大造（向東出身）…

本展では、そうした尾道出身、或いは尾道にゆかりある先人企業家の生涯と業績を採り上げ、企業家（起業家）精神（アントレプレナーシップ）の高揚を促すと共に、その高い志とチャレンジ精神、創意工夫、努力と困難を克服する勇気と英知を、とりわけ児童・生徒の皆さんに学びとって頂ければと思います。



尾道企業家列伝 で取り上げた先人企業家（左から山口玄洞、久保田権四郎、上山英一郎）

【女性経営者の先駆け～麻生イト】



1876（明治9）年 - 1956（昭和31）年
麻生組、城山倶楽部等経営者 尾道市長江出身

因島土生から対岸に位置する生名島（愛媛県上島町）へ渡り、海岸沿いに北へしばらく進むと、巨岩が一際目をひく庭園があります。入口の石碑には「三秀園」とその名を刻んでいます。三秀とは、安芸（広島県西部）、備後（同東部）、伊予（愛媛県）の三つの土地の勝れた景色を集約した意味が込められており、命名は時の愛媛県知事・市村慶三、文字の筆者は「憲政の神様」として名高い政治家・尾崎行雄（^{がくどう} 峯堂）になります。

この「三秀園」の傍らで静かに眠る人物が、尾道と因島を繋ぐ男装の女傑・麻生イトです。

1876（明治9）年（生名島の碑文には明治7年とある）の夏、旧尾道町の真ん中に位置する十四日町（現在の十四日町から長江にかけての地区）に生まれ、生家は煙草屋とも宿屋ともいいます。

小学校卒業後、神戸へ養女に出され、その後の足取りは不鮮明な点が多いのですが、行方不明となった養母を捜し歩き、料亭の住み込み女中、工事現場の事務員などをしながら各地を転々とした様です。人を頼って北海道へ渡っていた時期もあったといえます。

麻生イトが鮮明に、かつ華々しくその姿を現すのが、故郷から島一つ隔てた先の因島でした。

時代は明治の終り頃、時あたかも造船時代の幕開けであり、後の日立造船因島工場の前身となる大阪鉄工所が因島土生で操業を開始するのとほぼ時を同じくして、造船下請け業「麻生組」が立ち上げられ、イトはその経営者（創業者）として颯爽とここに登場するのです。

その事務所跡の建物は土生港近くの商店街沿いに残り、現在は酒屋さんの倉庫となっています。

麻生組の請け負う仕事としては、船をスクラップにする解船業（船の解体）が主たるものでしたが、併せて造船所への人材派遣（当時は口入屋^{くちいれや}といった）も担っていました。

工場側から要請が入ると、イトさんは組幹部を招集し、資金を渡して各地へ赴かせ、これという人材を集めて来させたといえます。

造船景気で膨れ上がった麻生組には、数百人という数の若い衆が寄り集まり、イトさんを親分の様に慕い、付き従っていました。

麻生組事務所跡のすぐ隣には、「麻生旅館」の看板を掲げた古い屋敷が見えます。現在は個人の住宅となっていますが、その名が示す通り、こちらもイトさんが経営した旅館跡です。

当時の因島には外からのお客さんを接待するのに適当な旅館が無かったため、イトさんは土地と資金を借りて地元で料理旅館を設けたのです。以来、旅館は繁盛し、因島を訪れた著名人の多くが麻生旅館を利用し、女主人であるイトさんと親しく交流したそうです。

島の女性実業家として輝きを放ったイトさんは、物語の世界でも魅力的に描かれています。

因島土生へ一時期身を寄せていた林芙美子は、短編小説『小さな花』（昭和9年発表）の中で、「おりくさん」の名でイトさんを登場させています。

映画化もされた今東光^{こんとうこう}の名作『悪名』(昭和35～36年「週刊朝日」連載)では、「因島で一番上等な麻生館」の女将(女主人)として、また、二千人の子分を従えた女大親分として、これまた颯爽と登場し、物語に鮮烈な華を添えています。

生前のイトさんと接触した愛媛県松山市出身の俳人(俳句を詠む人)・河東碧梧桐^{かわひがしへきごとう}も、その魅力や印象を作品中に語っています(昭和8年刊『山を水を人を』)。

イトさんの親分肌的な眼差しは、経営だけにとどまらず、地元地域にも向けられました。

土生幼稚園の開設や教育資金制度の創設、人口が急増した事に伴う排水溝の整備など、公共事業・社会事業にもその力を発揮しました。冒頭の三秀園(立石公園)、後背の立石山における観音霊場・山道の整備も、イトさんの尽力になります。

引退後の晩年は、母性的な観音菩薩への信仰を深め、静かな祈りの日々の中で、波瀾万丈、まさに物語的な生涯を閉じたのでした。

実業家として大成後の社会貢献^{ぶつもん き え}と仏門帰依^{やまくちげんどう}の部分は、山口玄洞翁とも相通じ合うところです。

企業家列伝ポイント！

時機を捉えた起業で成功(造船の幕開けと共に)

かゆい所に手を届かせる麻生旅館開業(島に無かった接待施設)

地域貢献・社会貢献にも力を注ぐ

展示物(麻生イト)



麻生イトゆかりの品々(大正～昭和期) 三阪達也氏所蔵

麻生イト^{けんしょう}顕彰の世話人であり、語り部である因島土生町の三阪達也氏宅には、麻生イトゆかりの品々が豊富に保管されている。

展示の品は、麻生イトの経営になる【麻生組】の団扇^{うちわ}(広告宣伝用に配布されたものではないかと思われる)に愛用の杖と灰皿。

麻生イトゆかりの地をゆく～因島土生、生名島、そして尾道へ



旧居 (現・三阪達也氏居宅兼店舗 【ペーパームーン】)



麻生旅館 (現在は一般の民家)



今も残る「麻生旅館」の看板



麻生組事務所跡 (現在は一般の民家)



しろやまクラブ (向左上の建物・大阪鉄工所因島工場の迎賓館)と現在のホテル・ナティーク城山



晩年を過ごした土生対岸の生名島



生名島に開いた庭園「三秀園」の石碑
文字は尾崎行雄(峯堂)の揮毫になる。



「三秀園」に立つ磐座(メンヒル)と弁天祠



三秀園後背の立石山登山口傍に建つイト石像(墓)
馬越栄造の作。



土生港傍の宮島さん境内に建つ竣工の碑 (世話人の一人に名を刻む)

この他土生町内のゆかりのスポットとして、土生町内に「土生幼稚園跡」、「荒神さんの石碑」があります。

そして尾道へ...



生地の産土神である長江良神社境内玉垣に「因島 麻生以登」を刻む
(幾野伝・撮影)

【不屈のチャレンジ精神～耕三寺耕三】



1891（明治24）年 - 1970（昭和45）年
尾道市名誉市民 瀬戸田町ゆかりの人物

瀬戸田と言えば、西の日光とも称される耕三寺が名高いものになっていますが、島に輝くこの寺を建てた人物こそ、耕三寺耕三こと本名・金本福松です（のち耕三寺耕三と改姓）。

仏の道を求められた耕三師は、実業家でもありました。その成功が、耕三寺建立へと結実する大きな源となっているのです。

金本家は福岡県直方市のおがたしにおいて、小さな鉄工所を営んでいました。創業者である父親が若くして亡くなったため、耕三師は学業を諦め、父の遺した鉄工所で働き、一家を支えていかなければなりません。小柄の体ながら、人一倍に汗を流す働き者だったといえます。

1908（明治41）年、酸素溶接の新技术を習得するべく、耕三師は大阪へ向かいました。そこで一度は受け入れを断られたものの、何ともしもというその熱意が伝わり、雑役として採用されました。

雑役ながら、工場の休日を利用してこっそり練習に練習を重ねるなど、並々ならぬ努力が認められ、やがて溶接工へと昇格されるのでした。

父の急死から学業断念、人一倍働き一家を支える、そして大阪へ武者修行に旅立つ...この流れは山口玄洞翁（企業家列伝 で紹介）とも近似しているところです。

主任技師のフランス帰国に際し同道を求められましたが断り、習得した技術を携えて直方へ戻ると、当時としては九州で唯一となるガス溶接の工場を操業します。1913（大正2）年の事でした。

第一次大戦下の好況も追い風となって、100人を超す従業員を抱える大工場へと発展して行きました。

耕三師の研究熱心はその後も変わらず、習得した溶接技術に更なる改良の手を加えて、これまた当時としては画期的な6インチ以上の径大鋼管の製法を発明するに至りました。

しかしそんな順風満帆は長くは続きませんでした。大戦後の世界的な大恐慌によって、耕三師の汗の結晶ともいえる工場は倒産してしまいます。

振り出しに戻された耕三師は、出発点となった大阪へ立ち戻り、再びゼロからのスタートに向けて動き出します。

かつての工場取引のあった大阪鋼管商店の支配人と、日本特殊鋼管合資会社を設立（資本金2万5千円）初年度から3万数千円の利益を上げるのでした。

1926（昭和元）年、経営方針を巡って意見が合わなくなった事から、耕三師は同社を離れると、新会社として東洋径大鋼管製造所を創業します。これまで培ってきた、2つの特許と3つの実用新案を含む技術力をいかに発揮し、受注も相次いで生産量はうなぎ登りでした。

そんな発明実業家として成功を掴み取った耕三師が、仏の世界へ心を寄せた契機は、最愛の母の死でした。

母の故郷の瀬戸田に母親の菩提を弔うための寺を建立しようと思い、京都・西本願寺で得度^{とくど}して僧侶となりました。まず、山梨の得祐寺^{とくゆうじ}の住職になり得祐寺を瀬戸田に登記上移転し、その寺号を耕三寺に変更するという手続を踏み、建立にかかりました。そこに失業者救済と郷土の発展を願う時の山本五次町長を始めとする周囲の要請・後押しが加わり、飛鳥時代から江戸時代までの代表的な寺院建築を採り入れた、壮大豪華なる耕三寺が建立されたのでした。

建築作業には、夏休み中の地元児童たちも多数参加し、奉仕の汗を流したというエピソードも伝えています。

とにかくその豪華さばかりに目が奪われがちな耕三寺ですが、「世の中のお母さんに感謝するお寺（場所）にしたい...」（『耕三寺夜話』より）というのが、耕三師がこの寺に込めた思いなのでした。

企業家列伝ポイント！

目標達成のためには努力を惜しまない。

失敗してもめげる事なく、不屈の精神で再び立ち上がる勇氣。



耕三寺本堂

展示物（耕三寺耕三）



（株）径大鋼管製造所の会社案内（昭和28年） 耕三寺孝三氏所蔵

当製造所の径大式電気溶接鋼管は、溶接部を焼鈍（金属・ガラスをある温度に加熱したのち、ゆっくりと冷却すること）することにより、特に衝撃力に対する性質を改善したものであった。

その品質の高さから、主要納入先として、（株）住友金属工業、日立造船（株）、川崎重工業（株）、三菱レイヨン（株）など錚々たる大企業が名を連ねている。

（株）径大鋼管製造所の会社案内（昭和37年） 耕三寺孝三氏所蔵

会社案内に、「ビルの基礎から・・・東京タワーの先端まで」とあり、当時の技術力の高さを窺い知ることができる。

（株）径大鋼管製造所の会社案内（昭和62年） 耕三寺孝三氏所蔵

昭和62年当時の製造工程を紹介。

【クボタ中興の祖にして大阪経済を支えた大物～小田原大造】



1892（明治25）年 1971（昭和46）年
株式会社クボタ（大阪市）第3代社長 尾道市向東町出身

トラクターやコンバインといった農業機械から工作機械のメーカーとして名高いクボタ（旧・久保田鉄工所、本社・大阪市）その創業者は因島大浜町出身の久保田権四郎翁ですが（企業家列伝で紹介）その後継（3代目社長）として会社の経営を担い、クボタ中興の祖と仰がれるのが、向東町出身の小田原大造です。

山陽鉄道（後の国鉄、現、JR山陽本線）尾道 - 糸崎間が開通した1892（明治25）年、向島東村（現、向東町）に生まれた大造氏は生来病弱で、病欠のために小学校を一年留年、進学した尾道商業高校でも同様でした。

これによって進学を断念した大造氏は、漢学者だった父親の後に続いて教員を目指し、自主的・積極的に勉強を積み重ね、22歳の時に文部省の検定試験に合格、晴れて中学校の教師となりました。

3年半ほど教員生活を送った後、大造氏は自分の進むべき路を教壇から企業へと、大きく舵を切り替えます。1916（大正5）年、兵庫県尼崎市にあった関西鉄工へ入社した大造氏は、教員から一転して企業人としての路を歩み出す事になったのです。

教員を目指して独力で猛勉強を重ねた大造氏でしたから、その勤勉性はここでも大きく発揮され、仕事に役立つあらゆる書籍を読みあさるなど、必要となる知識・教養を片っぱしから修得していったといえます。

翌1917（大正6）年、関西鉄工は久保田権四郎翁率いる久保田鉄工所（現、株式会社クボタ）に買収され、以後、大造氏は久保田鉄工尼崎工場の社員として、権四郎翁の下で働く事となりました。

この時、久保田鉄工から工場の責任者としてやって来たのが因島出身の須山会三氏でした。須山氏は勉強熱心な大造氏に対し、次のように諭します。

「実業界は学校と違って生存競争が激しい所である。事業で成功しようとするれば、実力のある社員を持たねばならない。したがって、会社の経営者は実力ある社員を探している。君もそのつもりで勉強しなさい...」

須山氏の激励を得て、大造氏はより奮起するに至り、勤勉と努力によって蓄えた実力を徐々に現し始めます。

1923（大正12）年、工場で巻き起こった労働争議（会社で働く労働者が待遇改善を求めて行なう行動）に、工場長代理にあった大造氏は先頭に立って交渉にあたり、難局を円満解決へと見事に導くのでした。また、工場の効率化にも力を注ぐなど、やがてその存在は社長である権四郎翁の目にも留まり、1938（昭和13）年、久保田鉄工所の常務取締役（社長、専務に次ぐ職位）次いで1945（昭和20）年には専務取締役（社長に次ぐ職位）に抜擢され、1950（昭和25）年、遂に久保田鉄工第3代目の社長に就任するに至りま

した。

小田原社長時代のクボタは、これまでの農業機械・工作機械にとどまらず、建設機械事業、住宅建材事業、水処理・環境事業などにも進出してゆき、会社が更に大きく発展していく礎を築いた人物として、クボタ中興の祖と今も仰がれています。

その力強い経営手腕は会社（クボタ本社）が所在する大阪の街でも発揮され、大阪経済を担う大阪商工会議所第17代会頭として、大阪万博（昭和45年、大阪府吹田市で開催された日本初の万博・日本万国博覧会）の誘致から、大阪国際空港の用地拡張や移転補償などの交渉・調整など、地域経済に多大なる貢献を果たしています。

金光教を信仰していた大造氏は、「神の前では社長も社員も皆平等で、共に幸せにならなければならない」と説き、また、「国のためになる事業をなす会社」を追求し続けました。

企業家列伝ポイント！

向学心に満ち溢れ、常に努力と研鑽を惜しまない。

困難に直面しても逃げる事なく、誠心誠意に真正面から対応する（労働争議解決）、地域貢献にも力を注ぐ。

展示物（小田原大造）



小田原大造氏が父親に宛てた手紙 向東町、小田原家所蔵

1947（昭和22）年11月23日に送られた手紙で、この時、大造氏はクボタ鉄工の専務取締役にあった（3年後の昭和25年に代表取締役社長に就く）。

両親の健康状態を気遣う文章で始まり、以下は主に会社内の動向を報告している。出張続きで多忙...とあり、重役として忙しく駆け回っている様子が伝わってくる。



教師時代の小田原大造氏 向東町、小田原家所蔵

1916（大正5）年3月、尼崎町立実業補習学校の卒業記念帳の中に、教師時代の小田原大造氏が見える。

この年、教員から一転して関西鉄工（後にクボタに買収される）へ入社する事になる。



小田原社長時代のクボタ会社案内 向東町、小田原家所蔵

大造氏が社長を務めた時代のクボタの会社案内。

向東と加島に建つ頌徳碑と顕彰碑



向東町古江浜地区に建つ頌徳碑

裏面碑文...古江濱才越地域内県道農道改良を始め区内開発事業地元負担金として金二百十万円也の御寄贈を賜り郷土の文化向上発展に寄与せられる。

1962（昭和37）年6月1日



向東町古江浜地区に建つ頌徳碑



加島（向東沖の島、現在は無人島）に建つ顕彰碑

加島の電気施設寄附に対して建てられた顕彰碑。

1961（昭和36）年2月の建立。